
集団凝集性と競技水準との関連

富永徳幸, 田口節芳

The relationship between group cohesiveness and game level

Noriyuki TOMINAGA and Setsuyoshi TAGUCHI

1. 緒言

集団凝集性の理論はフェスティンガーらによって公式化され、一般的に「集団に留まるよう集団メンバーに働きかけるすべての力の合力」(フェスティンガー, 1950), 「集団メンバーにとって, その集団における成員性の魅力」(バック, 1951)などの概念が用いられてきた¹⁾. 集団の他の成員の魅力, あるいは集団に所属することによって得られる威信といった, 成員が集団に対してもっている魅力である²⁾と言える. スポーツにおける集団凝集性をめぐる分析検討も数多く見られる. 筆者らは, 丹羽らの先駆的研究³⁾を援用し, 大学生(運動部員)を対象として凝集性と関連する変数を検討した結果, 学年, 部内での役割の有無, 出場頻度によって凝集性に差異が見られることを報告した⁴⁾. しかし, 成員が集団に対してもつ魅力の視点からの更なる分析が課題として残された. 競技成績が極めて高い集団に所属する部員は, その集団に所属することによって得られる威信に魅力を感じることが推測される. いわゆる名門チームあるいは強豪チームの部員であるという誇りである. このような感情と集団凝集性との関連は興味深い. 以上のような関心から本論では, 大学におけるスポーツ集団の競技水準に着目して集団凝集性の差異を検討することを目的とする.

近畿大学工学部情報システム工学科

Department of Information and Systems Engineering,
School of Engineering, Kinki University

2. 方法

2.1 概念規定

①集団凝集性

スポーツ集団(運動集団)の凝集性を構成する因子について、丹羽³⁾は「集団への魅力」、「集団への位置づけ」、「集団へ忠誠」、「集団との同一化」を、阿江⁵⁾は「メンバーの親密さ」、「チームワーク」、「価値の認められた役割」、「魅力」、「目標への準備」を報告している。以上のように、集団凝集性については集団成員(人間関係)の魅力や活動の持つ魅力、また集団に所属することによる利得といった側面が挙げられる。本論では、集団凝集性を「集団成員を集団に引きとめる力の程度、あるいは成員間のまとまりの程度」とする。さらに、集団凝集性の構成因子については阿江の5因子を援用し、「メンバーの親密さ」、「チームワーク」、「価値の認められた役割」、「魅力」、「目標への準備」とする。

②競技水準

スポーツの競技水準は一般的には、初心者・初級者・中級者・上級者といった技術水準を示す場合が多いが、解釈は単一ではない。例えば、小学生と大学生あるいは社会などの成長段階に連動して競技水準は異なる。本論では、同一のライフステージ(大学生)におけるスポーツ集団を対象とする。

また、学生スポーツ(中・高生を含めて)集団における成員の技術水準は均一ではないのが一般的であり、実際的なスポーツ集団(運動部・運動クラブ・サークル)を対象として技術水準を厳密に設定してデータを収集することは困難である。本論では、一定の競技大会への出場を競技水準の根拠とした。具体的には全日本大学選手権へ出場した集団の競技水準を「高水準」とし、それ以外の集団(あるいはそれを志向しない集団)の競技水準を「標準」とした。

2.2 分析の視点

阿江は、集団凝集性を「所属・課題」と「対人魅力」の2側面から検討し、集団志向(競技志向とレクリエーション志向)や試合成績との関連性について報告した。即ち、競技志向の強い集団や試合成績の良好な集団は「所属・課題」による凝集が大きい、「対人魅力」による凝集は試合成績に有意な影響を与えない⁶⁾ というものである。このことは、独立変数との関連性が顕著に認められる因子とそうでない因子とがあることを示唆している。集団凝集性を構成する各因子間での比較検討が求められる。

本論では、集団凝集性の構成因子を、「メンバーの親密さ」、「チームワーク」、「価値の認められた役割」、「魅力」、「目標への準備」とし、競技水準に着目してその差異を検討するとともに、因子間の差異について比較を試みる。

2.3 研究仮説

前節を踏まえて本論では次のような仮説を導いた。

- (1)高水準群は標準群より凝集性が大きい。
- (2)集団凝集性を構成する因子間の評価には差異がある。

2.4 分析の方法

前述の仮説を検証するために、質問紙によって収集したデータを分析検討した

2.4.1 調査

- ①調査方法 質問紙による配票調査法
- ②調査時期 平成 18 年 11 月 22 日から 26 日まで
- ③調査対象 全日本大学空手道選手権大会出場チーム所属部員 69 名^{注1)}および近畿大学工学部体育会系運動部員 83 名^{注2)} 以上合計 152 名。

表1 凝集性測定項目 (阿江1986による)

A - 1	チームに対する友情を感じ、それに満足している。
* A - 2	チーム内に揉め事がたくさんあり、お互いにくまくやっつけていけない。
A - 3	チーム内は親密であると思う。
A - 4	チーム活動以外でも、メンバーはお互いにくまくやっつけていける。
A - 5	メンバー間の人間関係は、良いと思う。
A - 6	チームメンバーはお互いに強い仲間意識をもっている。
A - 7	チーム内の人間関係が好きである。
* A - 8	チームメンバー間のコミュニケーションは少ない。
B - 1	試合で負けていても、チームはしっかりとまとまっている。
B - 2	自分のチームは、試合ではすばらしいチームワークを発揮する。
B - 3	メンバーは皆チーム内での自分の役割を自覚している。
B - 4	勝つためにまとまることのできるチームであると思う。
C - 1	あなたの役割やチームへの貢献はメンバーから十分に認められている。
C - 2	あなたの役割やチームへの貢献はコーチングスタッフから十分に認められている。
D - 1	今のチームのメンバーであることは非常に価値がある。
D - 2	今のチームのメンバーであることに大変誇りを感じている。
E - 1	コーチの指導方法は良いと考えている。
E - 2	試合で必要な作戦、役割、手続きは、コーチから十分に与えられている。
E - 3	コーチの作戦が理解され、達成されるまで、十分に訓練されている。

* は逆転項目

<構成因子>

- A : メンバーの親密さ
- B : チームワーク
- C : 価値の認められた役割
- D : 魅力
- E : 目標への準備

2.4.2 データの分析

凝集性の測定には阿江(1986)による質問項目を援用した。また、凝集性を構成する5因子に該当する質問項目は表1に示した。各項目について7段階尺度で得られた回答を項目得点とした。全項目を合計し総得点を、さらに各因子に該当する項目を合計して因子別得点を算出した。総得点および因子別得点について高水準群(N=69)と標準群(N=83)との2群間で比較検討(t検定)した。また、各群における因子間の差異についても検討した。なお、データ分析にあたってはSPSS15.0J for Windowsを用いた。

3. 結果および考察

3.1 競技水準による差異について

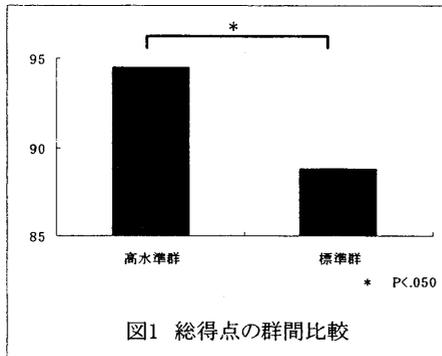


表2 因子別得点の2群間比較

	高水準群	標準群	t	df
メンバーの親密さ	41.53 (8.29)	38.62 (6.83)	2.32	150 *
チームワーク	19.79 (4.50)	19.73 (4.24)	.09	150
価値の認められた役割	8.98 (2.33)	8.45 (2.18)	1.44	150
魅力	10.62 (2.79)	9.83 (2.21)	2.01	150 *
目標への準備	13.50 (4.38)	12.07 (3.80)	2.16	150 *

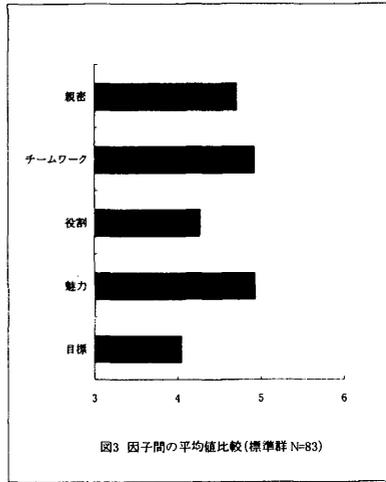
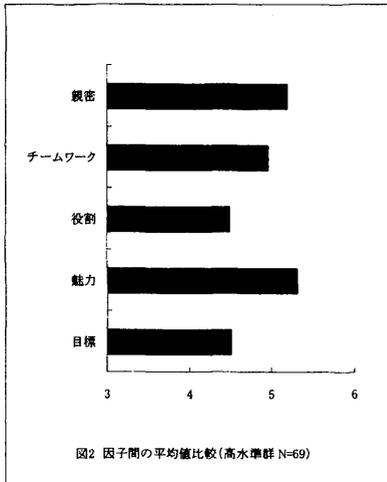
* $P < .05$ () 内は標準偏差

図1は総得点の2群間比較を、表2は因子別得点の2群比較を示したものである。総得点では高水準群が標準群より有意に高い ($t(139, 0.05)=2.11$)。因子別得点

では、いずれの因子も高水準群の方が標準群より高い傾向が見て取れる。メンバーの親密さ ($t(150, 0.05)=2.37$)、魅力 ($t(150, 0.05)=2.00$)、目標への準備 ($t(150, 0.05)=2.11$)の3因子において、高水準群の方が標準群より有意に高い。なお、価値の認められた役割、目標への準備の2因子について有意差は認められなかった。以上のように、総得点および5因子中3因子において有意差が認められたことから、高水準群の凝集性は標準群より大きいことが示唆される。即ち、仮説①「高水準群は標準群より凝集性が大きい」を支持するものである。

3.2 各群における因子間の差異について

因子別得点の平均値を比較することによって因子間の差異を検討した。図2および図3は各群の平均値を示したものである。両群ともに価値の認められた役割、目標への準備の2因子が他の因子より低い状況が見て取れる。表3および表4は因子間の平均値の有意差(t検定, 5%有意水準)の有無を示したものである。△は行項目が列項目より有意に高いことを、▼は低いことを、空欄は差がないことを表す。群別に検討した結果は以下の通りである。



(1) 高水準群について

メンバーの親密さ、魅力の2因子が他の因子より有意に高く、価値の認められた役割、目標への準備の2因子が他の因子より有意に低い。チームワークに関しては5因子の中位に位置している。これらのことから、高水準群では、メンバーが親密であることやチームの一員としての誇りを感じていることが凝集性に影響を及ぼしていると推測される。

(2) 標準群について

チームワーク, 魅力の2因子が他の因子より有意に高く, 価値の認められた役割, 目標への準備の2因子が他の因子より有意に低い。メンバーの親密さについては, 5因子の中位に位置している。これらのことから, 標準群では, チームワークの良さやチームの一員としての誇りを感じていることが凝集性に影響を及ぼしていると推測される。

表3 因子間の比較(高水準群 N = 69)

	A	B	C	D	E
A	*	△	△		△
B	▼	*	△		
C	▼	▼	*	▼	
D			△	*	△
E	▼	▼		▼	*

△:行項目が列項目より有意に高い

▼:行項目が列項目より有意に低い

空欄:有意差なし

表4 因子間の比較(標準群 N = 83)

	A	B	C	D	E
A	*	▼	△	▼	△
B	△	*	△		△
C	▼	▼	*	▼	
D	△		△	*	△
E	▼	▼		▼	*

A:メンバーの親密さ

B:チームワーク

C:価値の認められた役割

D:魅力

E:目標への準備

概括すれば, 両群ともに価値の認められた役割, 目標への準備の2因子が他の因子より低位にあり, 5因子への評価が均一でない。さらに, 両群ともに2因子の評価が高いが, その内訳が異なっている。即ち, 高水準群では魅力とメンバーの親密さが, 標準群では魅力とチームワークが他因子より評価が高い。高水準群ではチームワークのよさは大前提であり, むしろメンバーの親密さが重視され, 標準群ではメンバーの親密さよりチームワークのよさが重視されていることが推測される。いずれにしても, 仮説②「集団凝集性を構成する因子間の評価には差異がある」を支持するものである。

4. 結語

本論は大学におけるスポーツ集団の競技水準に着目して集団凝集性の差異を検討することを目的とした。集団凝集性について総得点および5因子(メンバーの親密さ, チームワーク, 価値の認められた役割, 魅力, 目標への準備)の因子別得点を算出した。算出された得点を高水準群(全日本大学選手権大会出場チーム所属部員 N=69)と標準群(同大会に出場できない, あるいはそれを志向しないチームの所属部員 N=83)とで2群比較した。また, 各群における因子間の差異について, 平均値を比較して検討した。その結果は以下のように, いずれも仮

説を支持するものであった。

(1) 総得点では高水準群の方が標準群より有意に高かった。

(2) 因子別得点ではメンバーの親密さ、チームワーク、魅力の3因子において高水準群の方が標準群より有意に高かった。

(3) 各群の因子間比較(平均値による)では、両群ともに価値の認められた役割、目標への準備の2因子が他の因子より低位にあるなど、因子間に有意差が認められた。また、高水準群ではメンバーの親密さと魅力の2因子が、標準群ではチームワークと魅力が凝集性に影響していることが推測された。

「謝辞」

最後に、本論の調査実施についてご協力いただいた学生諸君に深く感謝いたします。

「注」

注1) 平成18年度全日本大学空手道選手権大会に出場した本工学部空手道部4年生を通じて同大会出場チームに協力を依頼した。実施可能なチームの主将を通じて調査票を配布、回収した。

注2) 硬式野球、軟式野球、サッカー、剣道の各部の主将を通じて調査票を配布、回収した。

「参考文献」

- 1) M. A. ホッグ著, 廣田, 藤澤監訳, 集団凝集性の社会心理学, 24-28, 1994
- 2) 松田岩男, 体育心理学, 大修館書店, 358, 1980
- 3) 丹羽劭昭, 運動部員の成員性検査の作成, 体育学研究, 13, 1, 13-20, 1968
- 4) 富永徳幸, 田口節芳, 大学運動部の集団凝集性, 近畿大学工学部紀要, 36, 23-32, 2006
- 5) 阿江美恵子, 集団凝集性尺度の再検討, スポーツ心理学, 13, 1, 116-118, 1986
- 6) 阿江美恵子, 集団凝集性と試合志向の関係, および集団凝集性の試合成績への効果, 体育学研究, 29, 4, 315-323, 1985